

## 入院支援センターとの看護師間連携

11階南病棟 加藤直美

入院支援センター開設に伴い、入院に関する業務が整備され、入院支援がスムーズに行われるようになった。泌尿器科では入院支援センターと連携を図ることによって、患者サービスの向上や効率的な病床運営に繋げることができたためここに報告する。

## 1. 患者サービスの向上

センター開設前は外来受診時に外来看護師が部屋の希望を含めた入院説明を行っていた。外来看護師は診療介助や処置の合間をぬって説明を行っていたが、説明にかかる時間を十分に確保すると、他の業務に支障を来す状況であった。外来での慌ただしい雰囲気の中でやり取りが行われるため、説明の内容が十分伝わっているか確認が不十分なケースもあり、入院後に調整が必要になる事例もしばしばあった。センターでの入院支援業務が行われるようになってからは、患者の反応や理解を確認しながら説明を進めるなどのきめ細やかな対応が行われ記録されるため、その情報を基に入院前に調整する事が可能になった。手術目的の入院は、外来から情報伝達用紙で必要な情報を提供することで、手術毎の異なる物品説明も行っている。現在はクリニカルパス3種類の説明もセンターで行われるようになり、入院生活への導入がスムーズになった。

## 2. 病床運営

泌尿器科では担当医師とセンターの間で調整を行い、入院決定された患者の病床確保を行っている。センターで情報収集された患者の要望や配慮が必要な事例に関しては、入院オーダー画面の備考欄に記録されるため、その情報を基に入院前に適切な病床が確保できるようになった。また、泌尿器科特有の治療で個室利用を希望するケースもあり、希望調整が難しい場合は特別病棟を利用ながら治療に合わせて11階南病棟に転棟し、再度特別病棟に転棟するといった調整も行ってきた。しかし、特別病棟への入院を希望する患者のニーズもあり、医師とも協議したうえで、11階南と特別病棟との合同勉強会を開催し知識の共有を図り、現在では特別病棟での受け入れが可能になった事例もある。

センターを中心として情報交換を行うことで、患者側にも医療者側にも有用性が高いサービスが提供されるようになった。今後も看護師間の連携を深め、よりよいサービスの提供に努めていきたい。

## 入院支援センターにおける看護師間連携

入院支援センター 松本千佳子

入院支援センターは、全診療科の患者に対応し、外来からセンターを経て円滑に入院できるように、様々な支援を多職種で行っている。今回、外来・センター・病棟における連携について、泌尿器科疾患患者に対する支援の実際を報告する。

## 1. 外来看護師との連携

入院が決定した患者は、外来からセンターを案内される。センター到着時には、医師診療録の記録が保存されていないことも多い。手術毎に必要な物品が異なるため、適切な手術オリエンテーションを実施するために、外来からの情報提供が必要となってくる。情報の伝達をスムーズに行うために、泌尿器科外来とセンター間の情報伝達用紙を作成し、術式を番号で記載した紙を患者に持参してもらうことで連携を図っている。センター看護師は、電子カルテを確認し、記録が未完成でも、患者に必要なオリエンテーションが実施できる。治療内容の確認は、個室の希望調整時にも必要であり、患者ニーズに沿ったきめ細かい案内や支援を行うために、外来からの情報を役立てている。

## 2. 病棟看護師との連携

センターは、3種類の泌尿器科パス（平均月19件）を含む、平均月45件の手術・検査オリエンテーションに対応している。オリエンテーション時に、患者の状態や治療に対する要望などのアセスメントを実施している。外来からの情報をもとに、患者ニーズに沿った病床の確保に向けて患者と直接相談を行い、特別病棟の手配や総室入院への理解を得るなど病床管理も行っている。

センターで得た情報は、入院オーダー（備考欄）や看護記録に記録しているが、病棟での事前調整や特別の配慮が必要と考える症例については、病棟師長を通して、直接連絡を行っている。患者の状態や要望・訴えをセンターの看護師が確認した上で、病棟へ情報を提供することができるため、ベッド位置の調整やマットレスの変更、食事アレルギー対応や個室確保の必要性など、病棟が入院予定患者の情報を早めにキャッチすることで、入院環境の事前調整に役立つ情報が連携できるよう心がけている。

患者サービスの向上のためには、外来や病棟との連携は、欠かすことができない。今後も患者に必要な情報の連絡がスムーズに行えるよう、看護師間の連携強化に努めていきたい。